

(1) 対象魚種名：ヤコウガイ

(2) 要約

1. 種苗生産技術開発

1) 親貝養成試験

- ① 採卵時期を早めるため、冬期親貝を加温飼育したが、早期の採卵はできなかった。
- ② 昼間に採卵するため、明暗の周期を5時間早めた暗室で親貝を飼育し、採卵誘発を行ったが、産卵には至らなかった。

2) 親貝の雌雄判別試験

サザエでおこなわれているKc1滴下法で雌雄の判別を試みたが、卵、精子とも確認できず、雌雄の判別はできなかった。

3) 種苗生産

今年度は採卵翌日に幼生がほぼ全滅することが多かった。種苗生産数は15000個体にとどまった。

2. 中間育成技術開発

1) 餌料試験

カタオゴノリと *Gracilaria* sp. を与えた場合の稚貝の成長を比較した。両種を与えた場合の成長がもっともよく、カタオゴノリがそれに続いた。

2) 飼育水槽の改良試験

稚貝の成長と生残を向上するため水槽の改良を試みたが、明確な結果は得られなかった。

3) 排水沈殿池での放流による中間育成試験

水産試験場内の排水沈殿池に稚貝を放流し、中間育成試験を行った。成長は水槽飼育個体より良く、大型貝では回収率も良好だった。

4) 冬期の大量斃死防止試験

① ホルマリン浴による斃死防除試験

2週間毎に100ppmホルマリン浴1時間を行った。今年度は大量斃死が起きなかったため、効果は不明である。

② 個体別行動試験

ペンキでマーキングした60個体について活動を観察した。こちらも死亡個体は少なかったが、死亡した個体は他の個体に比較してシェルター内に入ることが少ないことがわかった。

3. 放流技術開発

1) 標識放流

平均殻長 25 mm以上の稚貝 21,784 個に着色ポリライトによる標識を付け、石垣島白保沖と竹富島南沖に放流した。

2) 標識方法の再検討

着色ポリライトの天然での脱落度合いを確かめるため、着色面積を増やした稚貝と配合飼料で飼育した白色の稚貝を放流した。

3) 漁獲物調査

水揚げの 60%に当たる貝を調査したが、標識個体は確認できなかった。

2000 年の八重山におけるヤコウガイの漁獲量は 1,301 kgと推定され、1997 以降増加傾向が続いている。